# 学位論文抄録

## 妊娠早期胞状奇胎の臨床的特徴ならびに流産後の管理指針に関する検討

**(Early-stage hydatidiform mole: clinical manifestations and the managements for the early diagnosis of following persistent trophoblastic disease)**

三 好 潤 也

指導教員

片渕　秀隆　教授
熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻産科婦人科学

# 学位論文抄録

**[ 目的 ]** 胞状奇胎は受精過程の異常により発生し、栄養膜細胞の異常増殖と間質の浮腫を特徴とする疾患で、絨毛癌などの続発症を発症する危険性がある。医学の進歩により極早期に妊娠が診断されることから、臨床的に胞状奇胎と診断される前に子宮内掻爬術が施行される妊娠早期の胞状奇胎が増えている。このような症例では胞状奇胎に典型的な肉眼所見で確認できず、病理組織検査が施行されなかった場合には胞状奇胎が看過されてしまう。妊娠早期胞状奇胎の臨床像を把握し、血中ヒト絨毛性ゴナドトロピン（hCG）値の推移を指標として胞状奇胎後の存続絨毛症を早期発見するための管理指針について検討することを目的とした。

**[ 方法 ]** 熊本大学医学部附属病院産科・婦人科で、超音波断層法と肉眼所見のいずれにおいても胞状奇胎の像を呈さず、病理組織学的検討によって初めて胞状奇胎と診断された 35 例の臨床像を検討した。血中 hCG 値は子宮内容除去術後に週に 1 回測定を行った。子宮内容物の病理組織学的検討で胞状奇胎が否定され、血中 hCG 値がカットオフ値である 0.5mIU/ml を下回るまで追跡が可能であった流産症例 24 例（流産群）を対照として、臨床像（年齢、妊娠週数、カットオフ値までの期間、初回月経開始までの期間）と血中 hCG 値の推移を比較検討した。

**[ 結果 ]** 妊娠早期胞状奇胎 35 例のうち部分胞状奇胎 2 例と診断不一致例 1 例を除外し、全胞状奇胎 32 例（妊娠早期胞状奇胎群）を対象とした。手術時の年齢および妊娠週数は妊娠早期胞状奇胎群と流産群でいずれも差はなかったが、血中 hCG 値は流産群に対し、妊娠早期胞状奇胎群は有意に高値であった($P<0.001$)。妊娠早期胞状奇胎群 32 例のうち、奇胎娩出後に順調な経過を辿り血中 hCG 値が陰性化した胞状奇胎（経過順調群）は 24 例、血中 hCG 値が陰性化せず存続絨毛症を続発した胞状奇胎（存続絨毛症群）が 8 例であった。経過順調群における手術時の妊娠週数および血中 hCG 値は流産群に比較し有意に高値であった($P<0.01$)。血中 hCG 値がカットオフ値を下回るまでの期間および術後初回の月経が発来するまでの期間は経過順調群と流産群でいずれも差はなかった。術後の月経発来を指標として血中 hCG 値の陰性化を検討すると、月経回数を繰り返す毎に経過順調群、流産群ともに血中 hCG 値が陰性化する症例が増加し、3 回目の月経後には両群ともに全例がカットオフ値まで低下した。存続絨毛症群は経過順調群に比較し手術時の妊娠週数($P<0.001$)と血中 hCG 値($P<0.01$)が有意に高値であった。存続絨毛症群では術後 4 週間後の血中 hCG 値は 25mIU/ml 未満に低下することはなかった。

**[ 考察 ]** 妊娠早期胞状奇胎は胞状奇胎としての典型的な臨床的、肉眼的、および画像所見を欠く。妊娠早期胞状奇胎からも存続絨毛症が発生する危険性があるが、子宮内容除去術の術後 4 週間目の血中 hCG 値が 25mIU/ml 未満に低下し、術後 3 回目の月経後に血中 hCG 値の陰性化を確認することは存続絨毛症を否定する上で有意義な所見であると考えられた。